

『うた、ね』における虚構の問題

——月の描写と恋心——

佐藤茂樹

『うた、ね』は若き日の失恋の記である。「多感な少女時代、ある上流貴族の青年との短い情熱的な初恋を経験し、その恋の終りごろから筆を執りはじめた回想記。この不幸な恋愛の顛末と、恋に傷ついた作者自身の姿を、やや自伝小説的構想で書いている」と考えられる作品である。「自伝小説的構想」とは、失恋という主題のもとに明確な構成意識をもった作品ということになる。日記文学にあつては異端的な作品と考えられるのである。自己劇化が企てられ、構成を有す作品であり、物語的で、自照性が乏しく、かつ、虚構性が強い作品として評価されている。にも拘らず、日記文学として位置づけられるのは、ひとえに、失恋が自己の体験に基づいているためだろうと思われる。

『うた、ね』の特色の中、虚構との関連が考えられるも

のとして、構成意識・劇的性・恋人の存在感の稀薄さ・自然描写の心情投影があげられると思う。構成に関して、前半の日記、後半の紀行という意図的な構成がうかがえる。渡辺静子氏は、更に、「起承転結に近い構成、形態である⁽³⁾と見ることができ⁽³⁾」と考察されている。恋愛期間は、恋が春に始まり、秋に終わるといふ、自然の推移と照応させた形である。但し、この点に関して、次田香澄氏は、『梅が枝の色づきそめし』ころに始まり、『冬草枯れ果つる』ときに終末が来たのは、季節の推移がいかにも象徴的であった。これは虚構ではあるまい⁽⁴⁾と考察されている。又、遠江へ向つて京を出る時、遠江から京へ戻つて来る時、ともに雨が降つていたとする場面設定は意図的であるように思われる。但し、これも虚構とは断定出来ない。

失恋故の突然の⁽⁵⁾出奔は劇的場面の代表的なものである。愛宕に移住の際の恋人との出会いは、偶然にしては出来過ぎの感はあるが、虚構ではなく、劇的な場面として考えられている。思えば、出奔の際、窮地を救ってくれた桂の人との出会い、遠江からの帰京に際しての乳母の急病も都合が良すぎる気がする。これらは、窮まった阿仏尼の救いとなっている。いかに、苦しみうとも、恋の出来事以外は、阿仏尼の理想的な方向へ事態は進展しているのである。但し、こうした劇的な場面を虚構とする根拠は全くない。今関敏子氏は前掲書（一七七頁）において、「劇的な世界への飛翔こそが作者のめざしているものであり」と考察されている。

恋人は高貴な身分と考えられているが、その表現は具体性を欠いており、存在感が稀薄である。但し、この点についても、具体的に玉井幸助氏の推定がある。⁽⁶⁾次田香澄氏は前掲書（一三八頁）において、「その貴人が読者にだれと知られないために具象性を与えなかったのではおそらくなかったろう。この作品において重要な存在である養父や乳母についても、省筆してなにも書いていないのである。これは、作者が人間関係よりも自己の恋愛感情の推移そのものに焦点をおいて綴ろうとしたからであろうか。あるいは、

作者の眼がまだ稚く、最も身近で重要な人物については、客観的に見する能力が十分でなかったからであろうか。おそらく両方であろう」と⁽⁷⁾考察されている。恋人の存在は疑われてはいないのである。

自然描写に関して、次田香澄氏は前掲書（八二頁）において、「作者は環境描写に関する限りわりあい事実の通りに、正直に叙述しているといえる。」と考えておられる。一方、長崎健氏は、『うた、ね』の天候と『平戸記』の天候記事とを比較されて、『うた、ね』の天候の記述は必ずしも正確なものではない」と⁽⁸⁾考察されている。そこで、本稿では八ヶ所の月の表現と、その時の阿仏尼の心情とを検討して、両者の関係を考えたい。その上で、『うた、ね』における虚構の問題を考えることとする。以下、話しの流れには沿わないで、月の形状ごとに考察をすすめることとする。

—

(1) 「月の光」、「月影」

① 物思ふ事の慰むにはあらねども、寝ぬ夜の友と慣らひにける月の光待ち出でぬれば、例の妻戸押し開けて、たゞ一人見出したる。荒れたる庭の秋の露、

かこち顔なる虫の音も、物ごとくに心を痛ましむるつ
まとなりければ、心に乱れ落つる涙を^{なみだ}をさへて、

② 眺むる門に面影と見し月影は、靈鷲山の雲居遙か
に心を送るしるべとぞなりける。

捨てて出でし鷲の御山の月ならで誰を夜な／＼恋
わたりけん

①は『うた、ね』の冒頭の場面である。月光を見ている
と、「荒れたる庭の秋の露、かこち顔なる虫の音」が「心
を痛ましむるつま」となるというのである。月光は阿仏尼
の傷心を慰めることは出来ず、かえって歎きを深めている。
それは、月の出を待つことが、恋人の訪問を待つことで
あったという習慣から、恋人のことを思い出している場面
であるからと考えられるかもしれない。しかし、より具体
的には、月光に恋人の面影を見ていると考えられるように
思われる。月光に恋人の姿を見て、感傷的になっている場
面であると考えたい。

②では、「面影とみし月影」として、「月」をはつきりと、
恋しい人の「面影」であると断じている。この場面は、尼
寺にはいり、本意を遂げ得た喜びと、仏道修行への確かな
意志が感じられ、新しく人生をやり直す気概に燃えている
場面と言える。それだけに、靈鷲山に昇る真如の月を、ど

うして、恋人の面影として恋慕していたのだろうかとい
う反省する程の余裕が生じている。次田香澄氏は、前掲書
(六三頁)において、「やや文飾があり理想化された表現は
空虚な感さえある」と言われている。門に佇みながら、来
ぬ恋人を思つて見る月は、まさに恋人そのものであったこ
とを告白しているのである。この二ヶ所の「月の光」、「月
影」は阿仏尼の恋人を偲ぶ心、恋人の面影が託されている
と思われる。

(2) 「月もいみじく明ければ」

③ 例の待つ程過ぎぬるはいかなるにかと、さすがに
目も合はず身じろき臥したるに、かの小さき童にや、
忍びやかにうち叩くを聞きつけたるには、かしこく
思ひ鎮めつる心もいかになりぬるにか、やをらすべ
り出でぬるも、われながら疎ましきに、月もいみじ
く明ければ、いとはしたなき心地して、透垣の折れ
残りたる隙に立ち隠るゝも、かの常陸宮の御住まる
思ひ出でらるゝに、「入る方慕ふ人の御様ぞ、事違
ひておはしけれ」と、立寄る人の御面影はしも、里
分かぬ光にも並びぬべき心地するは、あながちに思
ひ出でられて、さすがにおぼし出づる折もやと、心

をやりに思ひ続けるに、恥かしきこと多かり。

恋人の北の方の死後、「つれなき世のあはれさも、みずから聞えあはせたく」と言つて恋人の久し振りの来訪がある場面である。「月もいみじく明ければ」とは、恋人の来訪は「月のあかき日」にあるものだから自然な表現であるとも言える。この場面は、『源氏物語』「末摘花」の巻で、光源氏が末摘花の屋敷を訪れ、それを頭中將に見つけられる場面を擬した段として有名な部分である。但し、『うたゝね』のこの場面のもととなった、『源氏物語』の場面では、月の描写はない。⁽¹⁰⁾そこで、その前後の場面を見ると、光源氏の訪問の場面の描写は、

いざよひの月のかしきほどにおはしたり、いとかたはらいたきわざかな、物の音澄むべき夜のさまにもはべらざるに、と聞ゆれど、

である。「物の音澄むべき夜のさまにもはべらざるに」を、玉上琢彌氏は「朧月夜でやや曇っているために言う」と説明されている。

命婦が光源氏に、末摘花の琴の音をあまり聞かせない方が良いと判断した場面では、

命婦かどある者にて、いたう耳ならささてまつらじと思ひければ、

曇りがちにはべるめり、まらうどの来むとはべりつる、いとひ顔にもこそ、いま心のどかにを、御格子まゐりなむ、とて、いたうもそそのかさで、

として、「曇りがち」と描写されている。

光源氏が頭中將に見つかつて、二人で大臣邸へ行く場面では、

おのおの契れる方にも、あまえて、え行き別れたまはず、一つ車に乗りて、月のかしき程に、雲隠れたる道の程、笛吹き合はせて大殿におはしぬ、

として、「月のかしき程に、雲隠れたる」と描写されている。

『源氏物語』では、皓皓と照る月は描写されていない。

むしろ、十六夜月ではあるが、朧月夜であつたように推定されるのである。これは、『源氏物語』の場面を踏まえながら、阿仏尼は恋人の来訪による満たされた心を示そうとして、「月のいみじく明かけれ」と表現したのである。

阿仏尼は、恋人の来訪が途絶えがちであらうとも、「さすがに絶えぬ夢の心地は、ありしに変わるけぢめも見えぬ」、「この御文をつくぐと見るにも、日比のつらさはみな忘れぬ」、「契り違えぬしるべばかりにて、尽きせず夢の心地するにも」などと、日頃の歎きの思いは来訪や手紙に

より消えてしまうのである。こうした、恋人の来訪を「夢」のように思う満ち足りた心、及び、『源氏物語』の王朝的雰囲気になずらえられるような場面の華やいだ気分によつて、月を「いみじく明かければ」として設定したものと思う。又、この場面は、恋人との最後の逢瀬であつたが故に、一層、思ひ出多い場面として幸福感を味わい、その反映を月の描写に表わそうとしていると思われる。

(3) 「月なき空」

④ たゞ今も出でぬべき心地して、やをら端を開けたれば、晦日比の月なき空に雨雲さへたち重りて、いとももの恐ろしう暗きに、夜もまだ深きに、宿直人さへ折しも打声づくろふもむつかしと聞きゐたるに、かくても人にや見つけれんと空恐ろしければ、

出奔を実行した段である。「雨雲さへたち重りて、いとももの恐ろしう暗きに、……かくても人にや見つけれんと空恐ろしければ」と記す如く、出奔という行為への不安感、そして、人に見つかつてしまうことへの恐怖心を表現している。出奔という行為の最中であつて、全く、恋人のことを思うゆとりさえも、俥ぼうという気持ちさえもない状態で、恋人への決別の意志が表われているのである。出家へ

の決意が「七日月」であつたことを考えれば、実行までに二十三日経過したことになる。実行までの間の描写がないだけに、この期間は長いとも、短いとも断定は出来ない。「晦日」という月の変わり目を、この世との決別の日と決心していたのかもしれない。「晦日比の月なき空」に出奔したというのは、虚構であるとは断定出来ない。しかし、この時の阿仏尼の心情との関係を考えれば、恋人との決別の意志の表われが、「月なき空」に託されていると思う。全く、恋人のことは胸中にないのである。

二

(4) 「夕月夜」

⑤ みちのくの壺の碑かきたえて遙けき仲となりにけるかな

日頃降りつる雨の名残に、立ち舞ふ雲間の夕月夜の影ほのかなるに、押明方ならねど、「憂き人しも」とあやになる心地すれば……「を(お)のづから事のつゝゐで(い)に」などばかり、おどろかし聞えたるにも、

出家を後悔し始めた場面である。「みちのくの壺の碑かきたえて遙けき仲となりにけるかな」と歌を詠んでいるように、二人の間の絶縁を意識している。にも拘らず、「押

明方ならねど、『憂き人しも』(「あまのとををしあけがたの月みればうき人しもぞこひしかりける」『新古今』恋・一二六〇・読人しらず、『源氏物語』賢木)として、出家しても猶、つれない恋人のことが忘れず、思い悩んでいることを告白している。この事について、祐野隆三氏は「決意しながらも、さて出家ということになると過去の悲しいことがいろいろと思ひ出されるというのは、一度愛した男への想いを断つことの重さを物語っている」と説明されている。

恋人を諦め切ることが出来ないで、『をのづから事のつゝゐでに』(註)などばかり、おどろかし聞えたる」というように、最後の賭とばかりに手紙を出す。こうした心理の綾がここでの月の描写に表れているのであろう。恋人との仲の希望の見えない暗澹たる思いの中にも、かすかな望みを持っている。恋人への切なる思いも届かぬ願いであるという諦めが、「夕月夜の影ほのかなる」として、月を捉えている。叶わぬ思いとしての、はかない、希望のなさ、「陰曆一〇日頃までの夕方の時刻に空に出ている」(『日本国語大辞典』)、ほの暗い「夕月夜」に託されているのである。

(5) 「十六夜月」

⑥ 今日か明日かと心細き命ながら、卯月にもなりぬ。十六夜の光待出でて、程なき窓の蔀だつものも下さず、つくぐと眺め出でたるに、はかなげなる垣根の草に、まどかなる月影に、所からあはれ少なからず。

置く露の命待つ間の仮の庵に心細くも宿る月影、いづくにかあらん、かすかに笛の音の聞え来る、かの御あたりなりし音に迷ひたる心地するにも、きと胸塞がる心地するを、

病になつて愛宕へ移る場面である。ここでの問題点は、依然として、恋人との関係は絶縁状態にあるにも拘らず、「十六夜月」が描かれていることである。しかも、その「十六夜月」は、「まどかなる月影」でありながら、「心細くも宿る月影」として捉えられているのである。失恋の思いを抱きながらも、「いづくにかあらん……きと胸塞がる心地する」という程、心動かされやすく、恋人のことが胸から離れられないのである。「今日か明日かと心細き命ながら」と記すように、阿仏尼は、病故に、死を思う程心細い心理状態にある。そうした、心細い状態であるが故に、この世での名残りというばかりに、心中は恋人への思いで

占められていたのではないだろうか。一途な、ひたすらな恋心が「まどかなる月影」と結びついたものと思う。更に、「十六夜月」の、日没後、しばらくの間の暗闇に、死への不安感や満たされぬ恋心からの沈んだ思いを託したものと思われる。こうした、死を意識した不安な精神状態の中で、恋人のことを一心に思い、今生の思い出としたいという願望が、「十六夜月」を「心細くも宿る月影」として描写したものである。

(6) 「廿日余り」、「七日の月」

⑦ さすがひたみちにふり離れなむ都の名残も、いづくを偲ぶ心にか、心細く思ひわづらはるれど、あらぬ住まるに身を変へたと思ひなしてとだに、憂きを忘る、たよりもやと、あやなく思ひ立ちぬ。下るべき日にもなりぬ。夜深く都を出でんとするに、頃は神無月の廿日余りなれば、有明の光もいと心細く、風の音もすさまじく、身に滲み通る心地するに……先づかきくらす涙のみに先に立ちて、心細く悲しきことぞ、何に譬ふべしとも覚えぬ。

⑧ 十二月にもなりぬ。雪かきくらすして風もいとすさまじき日、いとく下し廻して、人三三人ばかりし

て物語などするに、夜もいたく更ぬとて、人は皆寝ぬれど、露まどろまれぬに、やをら起き出でて見るに、宵には雲隠れたりつる月の、浮雲紛はずなりながら、山の端近き光のほかに見ゆるは、七日の月なりけり。見し夜の限りも今宵ぞかしと思ひ出づるに、たゞその折の心地して、さだかにも覚えすなりぬる御面影さへ、さし向ひたる心地するに、まづかきくらす涙に月の影も見えずとて、仏などの見え給ひつるにやと思ふに、恥かしくも頼もしくもなりぬ。

⑦は養父に誘われて、遠江に下向する場面である。「あらぬ住まるに身を変へたと思ひなしてとだに、憂きを忘る、たよりもやと、あやなく思ひ立ちぬ」と記すように、「憂き」を忘れようとしての旅立ちである。この「憂き」は失恋にうちひしがれた思いであろう。又、旅立ちに際して、「さすがひたみちにふり離れなむ都の名残りも、いづくを偲ぶ心にか」と記すように、住み慣れた都への執着を語っている。都を偲ぶ心、それは恋人を思う心に通じるであろう。ここでの「廿日余り」の月は、終った恋だとはわかっていても諦め切れない、切ない思いが表わされていると思われる。都を離れるにあたって、恋人への思慕はより強いものとなり、片恋でしかないという自覚が下弦の月を

捉えたのだと思う。

⑧は阿仏尼が出家を決意する場面である。問題点は月が描き分けられていることであろう。まず、宵には「雲隠れたりつる月」として表現されている。これは、「人二三ばかりして物語などするに」という様に、友との語らいの中にあって、恋人のことを思う時間のなかったことの反映であろう。久し振りの恋人の来訪があつて、自らを末摘花になぞらえたりして、華やいだ気分を記した段にひき続いて、この段が記されている。その間は分からないが、出家の決意を示す段であるだけに、来訪の途絶えがはっきりした頃だろうと思われる。そうした暗澹たる思いが、「雪かきくらしで風もいとすさまじき」として自然を捉えている。絶望の思いのまま、友との会話にあつては、恋人のことを偲ぶことはなかったのであろう。それが、月を「雲隠れ」として描写した理由のように思われる。

ところが、「夜もいたく更けぬとて、人は皆寝ぬれど、露まどろまれぬに、やをら起き出でて見るに」として、宵とは違って一人になって空を眺める。やはり、一人になれば、思い出すのは恋人のことばかりである。「見し夜の限りも今宵ぞかし」というように、一ヶ月前の逢瀬を回想している。そうした、心情の変化が月の描写にも表わられてい

る。「宵には雲隠れたりつる月の、浮雲紛はずなりながら、山の端近き光のほのかに見ゆるは、七日の月なりけり」である。具体的に「七日の月」としているのは、次田香澄氏が前掲書（四一頁）において「この六節での七日の月は、彼と最後にあつた夜から一月たった夜のものだけに、実感が有意義深いものである」と考察されている。別れの場面の月として、よく記憶していたと言えるのであろう。但し、この「七日の月」を恋人への想いを表象するものと考えた場合、その具体性は、七日の月の形状が示す如く、片思いの象徴であろう。切に思う気持ちはありながら、その思いは叶わぬという諦めが「七日の月」を捉えたものと思われる。

「まづかきくらす涙に月の影も見えず」とは大仰な表現である。(3)の「月なき空」や、ここでの「雲隠れの月」とは違うのである。出ているはずの月が涙のために見えなくなったというのは、自らの意志で、不本意ながら、月を見ることを拒否したのである。これは出家の決意によるもので、涙ながらの恋人との決別を暗示しているのだと思う。この恋を諦めるという覚悟が生じたのである。月が涙により見えなくなったことを、「仏などの見え給ひつるにや」としているのは、自己正当化の表われだと思われる。恋人

を諦める悲しみの涙を、「仏などの見え給ひつるにやと思ふに、恥かしくも頼もしくもなりぬ」として、喜びの涙に転化しているのである。

この場面は、出家に対する不安、恐怖心、そして、恋人に対する絶望的気分が認められる。その心境は、「雪かきくらして風もいとすさまじき」によって形象されている。

又、「雲隠れたりつる月」とは、なかなか姿を見せない恋人の比喩でもある。阿仏尼の心情は自然描写に投影されているのである。一方、「雲隠れの月」から「七日の月」、更には「涙のため見えなくなつた月」への描写の変化は、それぞれ、「恋人を思っていない状態」から、「恋人への片恋の状態」、そして「恋人との決別の意志」という「恋心」の変化が表われているのである。月の描写は阿仏尼の恋人に対する心情が投影されていると言える。

以上の如く、月の描写については明確な表現技巧への意識がうかがえる。『うたゝね』においては、月は恋人として表象されている。恋人のことを思う時、いつも月が表現されているのである。より具体的には、「七日の月」と「廿日余りの月」は、上弦の月、下弦の月という違いはあるが、形は相似形である。ともに、その形状から片思いの表象として考えられる。しかし、「七日の月」は出家を決

意するが、それは、今関敏子氏が言われるように、「心見」（註(5)）の行為であり、又その後、手紙を送ったりするように、絶望の中にもまだ、かすかな希望を抱いている状態である。その願いが、片思いではあっても、「十五夜」へと向う「七日の月」に託されているのである。一方、「廿日余りの月」は、阿仏尼の思い余つての手紙に対し、冷酷な手紙が返ってくるという、二人の関係は完全に終つたという認識の表われである。回復不可能な思いが、「十五夜」を過ぎた「廿日余りの月」として捉えられているのである。疑いのない満ち足りた恋心を表わす「十五夜」を中心にして、恋心と絶望感との関係を「月」の形状によって形象していると考えられる。

三

ところで、⑧には道理に合わない表現がある。「たゞその折の心地して」と言つて、恋人と最後に会つた日のことを思い出しているながら、「さだかにも覚えずなりぬる御面影」と語っている。恋人の面影もはつきりとは思ひ出せないというのは尋常ではない。失恋故に、出奔するほど思いつめているのに、その人の顔を忘れることはあり得るのだろうか、問題のある表現だと思われる。自分の本心とは逆

のことを言ってしまうことは応々にしてあるものである。ここもそうした偽りの表現と見ることは出来る。それは、恋人へのあてつけである。皮肉を込めたあてこすりなのである。あなたのことなんか、とうに忘れてしまいましたよという、強がりのポーズである。恋人との決別の意志を健気にも気力でかろうじて保っていると考えられるのである。

しかし、真実を語っていると読むことも出来る。本当に、阿仏尼は恋しいはずの恋人の顔が思い出せなかったのである。まさしく、忘れてしまったと見ることが出来る。最後の逢瀬の様子や雰囲気は思い出せても、恋人の顔はイメージとして湧いてこなかったとは、何を意味するのか。それは恋人とおぼしき男性とは、「打しきる夢の通ひ路は、一夜ばかりの途絶もあるまじきやうに慣らひにける」という程の逢瀬を重ねた経験がなかったことを意味するように思われる。『うた、ね』の恋は、阿仏尼の一方的な恋でしかなかった。男にとつては、恋人とは言えないような阿仏尼との関係でしかなかったのである。⁽¹³⁾それを阿仏尼は、あたかも愛があったかのように創作した。松本寧至氏は前掲書（二三七頁）において、「はじめて現れた男性を理想化し、その理想に向けて自分をぶつつけて行く」と考察されている。

る。現実の恋の理想化を考えておられる。阿仏尼は『うた、ね』において、仮空の恋を創作し、悲劇のヒロインを演じることによって、自己の別の人生を生きようとしたのである。虚構を交えながら、失恋というテーマに即して語ってきたが、思わず、「定かにも覚えすなりぬる御面影」として、恋の実態を漏らしてしまったというのが真相のように思われる。

前述したような、仮構の恋だとすれば、恋に恋し、そして、失恋したという、言わば、世間並みの恋をしたという偽装恋愛を語ったと考えることが出来るようにも思う。又、別の見方をすれば、歌題の「会不逢恋」という和歌的世界を、古歌、古物語を通して散文化した作品と言うことが出来るようにも思う。仮構の恋であることが、先学において説かれていたような執筆姿勢を別にして、この作品における恋人の存在感の稀薄さとつながっているようにも思う。安藤淑江氏は「作者にとつてすら、この恋は、現実感の乏しい『夢のよう』な恋であったのではないかと思うのである⁽¹⁴⁾」と考察されている。現実を夢の如きものと錯覚したのではなく、まさに夢物語であったと思うのである。又、安藤淑江氏は前掲書（一九一頁）において、「作者は自分自身のその悲しさや不安を、恋人に訴えたりはしなかったよ

うである。……恋人に対して自己主張をしない、できないという作者の状態は、恋愛の全期間を通して見えるものである⁽¹⁵⁾」ことを指摘されている。

行動的な阿仏尼の実像、及び作品中の、出奔に見られるような激情性、遠江からの帰京に見られるような自己中心的思考を思えば、耐える阿仏尼像は、阿仏尼らしくないと思われる。敢えて、忍恋を演じているようにも思われる。これも現実でない、仮構の恋故のことにように理解される。『うた、ね』における虚構は、月の描写に対してだけでなく、失恋自体が仮構の恋であったと思われるのである⁽¹⁶⁾。『うた、ね』は一人称告白体による物語と言え、和歌的発想の「会不逢恋」の散文化を図った作品だと思ふ⁽¹⁷⁾。

註

- (1) 『日本古典文学大辞典』(岩波書店・一九八三年刊)
- (2) 長崎健氏は、『うた、ね』の構想と執筆意図(『女流日記文学講座』第六卷、一六四頁、勉誠社、平成二年刊)において、「この作品に年次推定のための内部懲証が全く存していない」ということは、この作品がすぐれて私的な記録であるとはいえ、中世女流日記の諸作品のなかでは、やはり特異な性格を示しているものといっているように、渡辺静子氏は、『うた、ね』における古典摂取の方法(『女流日記文学講

座』第六卷、一八五頁、勉誠社、平成二年刊)において、「この『うた、ね』は、王朝の日記文学作品の系譜に入ることとは間違いないが、物語でもない、歌集でもない、こうした中間的日記作品」と説明されている。

- (3) 渡辺静子著『中世日記文学論序説』(新典社・一九八九年刊)一四八頁。
- (4) 次田香澄著『うた、ね 全訳注』(講談社学術文庫・昭和五三年刊)四七頁。
- (5) 今関敏子氏はその著、『中世女流日記文学論考』(和泉書院・昭和六二年刊)一七五頁において、『うた、ね』の出家は、失恋の結果ではなく、離れかけている相手の心を試す『ころみ』(心見)の行為ではなかったろうかと考察されている。
- (6) 玉井幸助著『日記文学の研究』(塙書房・昭和四〇年刊)六一一頁。
- (7) 松本寧至氏はその著、『中世女流日記文学の研究』(明治書院・昭和五八年刊)一三五頁において、「その人が誰であるか、書かないのがエチケットでもあるが、そのために臆化したというだけではない。その人の実在感がまことに稀薄なのである。これは、作者がその男性をつかみ得なかった、ということだろう」、今関敏子氏は註(5)の書(一六七頁)において、「実質的には終ったも同然の、いわば、置き去りにされてしまった主人公の心の中のみ、解決の残されている状況が作品世界の出発点なのである」、長崎健氏は前掲書(一

六三頁)において、「作者の関心が個別の存在としての『恋人』にあるのではなく、失恋という『事件』にあったということになりましょう」、安藤淑江氏は、『うた、ね』の主題——『うちつけにあやにく』な心のあり方——(『名古屋大学国語国文学』59、『名古屋大学国語国文学会』において、「自分の周囲の状況を自明のこととして省筆したために生じたものと推察できる」と考察しておられる。

- (8) 長崎健氏「『うた、ね』考」(『中央大学 文学部紀要』57)
(9) 渡辺静子氏は註(2)の書(一二一頁)において、「月の光には恋人の姿を、虫の音には自分の姿を投影し」と考察されている。

- (10) 頭中将と光源氏との次の贈答歌があるだけである。「もろともに大内山は出でつれど入る方見せぬいさよひの月」、「里わかぬかげをば見れど行く月のいるさの山をたれかたづぬる」

- (11) 玉上琢彌著『源氏物語評釈』第二卷(角川書店・昭和四一年刊)一七四頁。

- (12) 祐野隆三氏「『うた、ね』試論——心情語を中心として」(『山梨英和短期大学 紀要』第20号)

- (13) 山口智子氏は、『うた、ね』にみる阿仏——人物描写を中心に——(『国文鶴見』第十九号)において、「物語的效果を向上させるために、その場面にふさわしい天候描写を当てはめたとも考えられるが……実験であると思われる」と考察されている。

- (14) 松本寧至氏は前掲書(二三六頁)において、「阿仏尼をあまり本気で相手にしていない、ちよっとした出来心で相手になったという感じである」と考察されている。

- (15) 安藤淑江氏「『うた、ね』に現われた恋——恋人を見る眼差しについて」(『女流日記文学講座』第六巻、勉誠社・平成二年刊)一九〇頁。

- (16) 虚構の問題について、今関敏子氏は註(5)の書(一七〇頁)において、『うた、ね』は、古代物語世界への憧憬の強い、美文調で綴られる劇的な内面世界であり、その観念性の延長線上には、虚構、創作が想定される」、長崎健氏は、『うた、ね』——「心情」の表現——(『日本文学』一九八六年一月号)において、「作者はその失恋経験を臚化または虚構化の方法によって表現しようとしたものではなく、その体験による心情を和歌的用語に同化することで表現しようとしたのである」と考察されている。

- (17) 今関敏子氏は註(5)の書(二八一頁)において、「創作に近い性質をもつ日記作品である」、渡辺静子氏は註(2)の書(二三八頁)において、「初恋物語とでもいふべき自伝物語である」と定義されている。

- 〔付記〕 テキストとして、『うた、ね』は『新日本古典文学大系 中世日記紀行集』(岩波書店)、『源氏物語』は玉上琢彌著『源氏物語評釈』(角川書店)、和歌は『新編 国歌大観』(角川書店)を用いた。